

CARE World

Vol. **11** ケア・インターナショナル ジャパン
Newsletter
February 2009



ケア・インターナショナル ジャパンは、世界70カ国で貧困の根源の解決に取り組む国際協力NGO、CAREの日本事務局です。CAREの活動は、世界中の33万人のサポーターに支えられています。

Contents

- page **1** 企業とCAREのパートナーシップ
- page **3** 理事長就任のご挨拶
- page **4** 事務局からの報告
日本ユニシスグループ・社会貢献クラブ「ユニハート」寄付団体展示会に出展/支援組織 カンボジア現地視察ツアー/会員の皆様とMGP参加者の皆様に対する特典のご案内
- page **5** ベトナム「HIV/AIDS 予防事業」終了報告と新規事業紹介
- page **6** レント「センク川渓谷における干ばつ被災者の栄養改善事業」終了報告
- page **8** CAREストーリー ～ガザ地区「学校に爆弾が落ちたとき、友だちはそこにいたのかな？」
CARE Notice Board

企業とCAREのパートナーシップ

ソニーのCSRとNGOとの パートナーシップ

ソニー株式会社 CSR部 統括部長
富田秀実

ソニーでは、CSR活動を2つの持続可能性の側面、「持続可能な経営」のために必要とされる活動と「持続可能な社会」の構築に向けた貢献と位置づけています。

「For the Next Generation」のキャッチフレーズのもと、グローバルな視点を持ち、特にソニーの持つイノベーションによる新たな価値創造と、さまざまなステークホルダーとのパートナーシップを重視した活動を展開しています。特に、気候変動問題や大規模災害のように1つの組織で解決するには、あまりにも大きな問題が世界には山積しています。その点で、NGOを含めた他の組織との連携は、今後も非常に重要なCSR活動の基本となると考えています。

企業から見た場合、どのNGOと連携するかが、活動の成否を決することにもなり、非常に重要な課題となります。

ソニーでは、まず第一に、そのNGOの能力すなわち、その対象としている分野での専門性、問題解決への手段、ノウハウ、経験、そして継続性と実績を重視しています。次に、説明責任。活動の結果、資金の使途、組織体制を明確に説明できることも重要です。企業であれば、法律的にも、CSRとしても多様な説明責任が求められていますが、同じレベルとはいかないまでも、一定レベルの説明責任を果たす覚悟がNGO側にもなければ、支援に参加する企業の社員等の理解を得ることはできませんので、NGOにも期待したい部分であります。

これまでもソニーでは、CSR活動の一環としてスマトラ島沖大地震や新潟中越沖地震、バングラデシュのサイクロンなど、世界中の災害に対し、緊急人道支援に取り組んできました。この



ような災害支援に際しては、現地のニーズに的確に対応できると考えられる組織を支援先として選定し、支援方法を選定します。2008年5月2日から3日にかけてミャンマーを直撃した大型サイクロン「ナルギス」の被災者支援については、そのような観点を考慮し、ケア・インターナショナル ジャパン(以下、CARE)との協働を行うこととしました。

今回、初めてCAREとの協働を選択しましたが、それは、現ミャンマー政権のもとさまざまな団体が人材派遣や物資の受け入れを拒否されている中、CAREは、ミャンマーにも長年現地事務所を持ち、現地ニーズにマッチした継続的な活動をされていると判断し、協働することに至りました。

この支援を行うため、ミャンマー・サイクロンの被害者支援に対する募金活動を全世界のソニーのグループ会社で開始。社員募金の方法として、グループ内の金融事業を行う各社と連携し、ソニーカードによるクレジット決済やソニー銀行の専用口座の開設、また、電子マネーEdyの仕組みを用いて、社員が業務の合間にそれぞれのパソコンから募金ができるしくみや、イベント時にEdy端末を用意して、社員が募金しやすいようにするなど当社独自の募金環境を整備しました。

このサイクロン被害に対して、社員から集まった募金にマッチング・ギフト(同額寄付)を行い、さらに会社からの義援金とあわせてソニーグループ国内外(東南アジア、日本、米国)で約2,000万円の支援を行いました。

ミャンマーでは、すでにCAREの緊急チームが結成され、被災地の調査と緊急支援が開始されていましたが、ソニーグループの寄付は、農村部の復興支援とコミュニティの再建を目的とした「ミャンマー・サイクロン早期回復のための農業支援事業」に活用されることになりました。

最も深刻な被害を受けたAyeyarwady地区およびYangon地区を対象に、種もみ5,000袋の調達と配布、農業の働き手として欠かせない牛もサイクロンの犠牲となったため、牛に変わ



支援によって提供されたトラクターにまたがり、笑顔の村人たち

るハンドトラクター50台の購入を行いました。コミュニティへのトラクター配布と関連機材・道具管理支援および燃料支援を約6カ月かけて実施するもので、実際に種もみを直接まき、現在は最終段階の収穫を待つ状況です。

サイクロンにより、物理的・精神的な被害を受けた被災者の農民の方々が、被害を乗り越えて、確実に収穫をあげることができれば、大変喜ばしく思います。収穫後もCAREのご協力のもと、定期的なモニタリングを続け、今後も現地の農民の人たちのコミュニティと生活の復興ができるよう見守ってきたいと考えています。



「寄付付き商品」
の販売が
スタートしました

◆株式会社ヤマノビューティメイト様
琥珀エキス入り高級美容液「コハクセンチュリーセラム」



創始者山野愛子様のご生誕100周年を記念して、これまで同社を支えてくださったお客様である「女性」に恩返しをしたいという思いから本企画がスタート。今年1月より販売が開始された「コハクセンチュリーセラム」の売上の1%が当団体の活動に寄付されます。同商品に関する詳細は <http://www.doronko.co.jp> をご覧ください。

◆丸紅株式会社様
フィリピン産の新ブランドバナナ「富楽宝(ブラボー)」



昨年11月より販売が開始されたフィリピン産の新ブランドバナナ「富楽宝(ブラボー)」の売上の一部が当団体の活動に寄付されます。キャッチコピーは、「"こころ"も"おなか"もいっぱいになろう!」。全国のダイエー店舗ほかにおいて販売されています。ラベル(左)に貼られている、かわいい「ブラ坊」キャラクターが目印です。



理事長就任のご挨拶

(財)ケア・インターナショナル ジャパン理事長 数原 孝憲

この度、「財団法人ケア・インターナショナル ジャパン」の理事長に就任致しました。故横田弘理事長にお仕えしたご縁で2004年6月理事に就任、あわせて、「ケア・インターナショナル」の理事として本財団の対外活動に従事して参りましたが、理事長の大任をお引受けし身の引き締まる思いですが、開発途上国の人々ならびに支援者の方々の期待に応えるよう最善を尽くす所存です。

これまで私は、人生の大半を外交官として過ごし、NY国連代表部、インドネシア、インド、ナイジェリア他に在勤、アイルランド大使を最後に10年前退官しました。また、青年海外協力隊事務局長、JICA理事を歴任し日本政府のODA活動に深くかかわってきました。そして退官後は二つの「夢」の実現に生きがいを求めてきました。

一つは最も困難な状況にある女性や子どもの幸福と安定した生活への「夢」、途上国の人々への人道支援です。第二次世界大戦後の数年にわたり、私どもは米国CAREの援助物資を受け取りました。私もその支援で育った世代に属し、2005年のCARE創立60周年には、内外の記念集會に参列、感謝の念を新たに致しました。今日わが国は、世界第二の経済大国として、開発途上国の開発と人々の生活向上を支援するとともに、内外の援助団体と協力して貧困・教育・女性のための支援のほか、地球環境保全・災害復旧支援などにも取り組んでいます。その一端を担うことが生きがいです。

もう一つの私の「夢」は私の所属する合唱団の外国公演です。3年前、大学OB/OG合唱団の仲間とウィーン公演を果たし、次いで今年、同じ仲間と9月パリ公演を目指しています。ナポレオンの墓のあるアンヴァリッドの教会堂でハイドン没後200年記念コンサートに参加し、ハイドンのミサ曲を歌います。これはCAREの慈善公演で、日本でも同様な公演を催したいと考えています。「自分一人の夢でなく多くの友の夢がほしい(羽仁もと子)」、これは亡き母の座右の言葉でしたが、この二つの「夢」を目指すことが今の私の生きがいとなっています。

他方、本財団理事長としての今年の「初夢」は、「新公益法人」の資格を取得して当財団の安定と発展の基礎を固めることです。この「夢」を実現すべく、現在、役員と事務局スタッフが一つになって鋭意努力しています。どうか、関係各位のさらなるご指導、ご協力、ご支援をお願いし、就任のご挨拶と致します。



2003年11月撮影。日本マラウイ協会会長として、マラウイ大統領招待で現地を訪問。マラウイ派遣青年海外協力隊員と(写真左から2番目)



1995年11月撮影。日本国大使として信任状奉呈後、アイルランド大統領メアリー・ロビンソン閣下と



1985年5月撮影。青年海外協力隊事務局長としてケニアの中学校を訪問(写真中央)。数学教師の安藤隊員(向かって右隣り)と生徒たち

事務局からの報告

日本ユニシスグループ・社会貢献クラブ「ユニハート」寄付団体展示会に出展

当団体は昨年度から、日本ユニシスグループ・社会貢献クラブ「ユニハート」からのご寄付に加え、同社からの同額のマッチングギフトをいただき、ベトナムにおける「HIV/AIDSと人権プロジェクト」をご支援いただいています。

2008年10月15日、同社から寄付を受けた団体が一同に会し、同社主催による社員向けの活動展示会が開催されました。お昼休みを挟んでの約2時間にわたる展示会には、約100名にも及ぶ社員の皆さまが来場され、当団体も展示していた事業紹介パネルや団体紹介リーフレットなどをご覧いただきながら、じっくりと社員の方一人ひとりとお話をさせていただくことができました。今回のプロジェクト実施地であるハノイに出張経験がある社員の方からは、「当社のように海外に拠点をもつ企業にとっても、HIV/AIDSの課題は本当に無視できない課題」と、プロジェクト推進にあたって力強いお言葉をいただきました。

当団体の活動は、多くの企業の皆さまにご支援いただいておりますが、今回のように実際に社員の皆さまに直接お話をする機会は限られています。ご寄付に加えて、大変貴重な機会を与えてくださった同社に心より感謝いたします。



ケア・インターナショナル ジャパン支援組織 カンボジア現地視察ツアー

2008年11月23日～24日、ケア・フレンズ東京およびケア・フレンズ岡山の会員13名の方にカンボジア現地視察ツアーにご参加いただきました。ケア・フレンズのカンボジア支援事業「女子教育奨学制度事業」および「コミュニティのための人材育成事業」を通して、中学・高校課程を5年間にわたって支援を受けた奨学生のうち、9名との対談が実現しました。

ケア・フレンズの皆様は、奨学生代表のコサルさんから直接、感謝の言葉を聞き、また立派な女性に成長した女の子たちを前にして、「学校などの施設を建てること以上に、こうして人を育てることの大切さがようやくわかりました」と認識を新たにしてくださったようです。

一方で、奨学生が高校を卒業しても就職先が見つからずに農村に残っていることを懸念される方もいらっしゃいました。現在、ケア・フレンズに支援していただいているココン州の「青年男女の能力向上プロジェクト」では、まさにこの課題の解決に焦点をあてています。ケア・フレンズのご寄付と日本政府の助成金により実現した同事業では、若者が読み書き計算の習得だけでなく、手に職をつけ、収入を得られるようサポートし、貧困から抜け出せるように支援することが目的です。

ツアーに参加してくださった皆様にお礼を申し上げるとともに、今回の視察を契機に、今後もCAREの活動について一層のご理解と継続的なご支援をお願いしたいと思います。



ケア・フレンズ東京、安倍洋子会長のご挨拶



ツアーに参加されたケア・フレンズの皆様と奨学生

会員の皆様とマンスリー・ギビング・プログラム参加者の皆様に対する特典のご案内

このたび、会員(個人賛助正会員/準会員)の皆様とマンスリー・ギビング・プログラム(MGP)参加者の皆様にお届けする、「CARE Paper Blog(ペーパーブログ)」(年3回発行予定)を創刊しました。毎回、現地事業に携わるスタッフが、支援地域の人々の日常生活や自らの体験談など、ライブ感溢れる現地情報を紹介します。

さらに、2009年中にこれらの会員の更新手続きをしてくださった方とMGPに継続して参加してくださった方、そして、新たに会員またはMGPへの参加をお申込みくださった方に、支援地域の人々の写真入りポストカードと、株式会社ラブ・ラボ(www.rub-lab.com)のご協力により製作されたCAREロゴ入り携帯クリーナー付ストラップをプレゼントさせていただきます。ロゴ入りクリーナーを携帯に付けていただくことでCAREを身近に感じていただいたり、ポストカードをご友人にお送りいただくことで、CAREの活動をより多くの人に知っていただくきっかけ作りをしていただければ幸いです。

なお、これらの特典は、他の郵便物の送付時に同封させていただきますので、お一人お一人のお届け時期が異なりますことをご了承ください。皆様の会員、MGPへのご参加をお待ちしております！



ベトナム「HIV/AIDS予防事業」終了報告と新規事業紹介

事業部 濱岡 良子

終了報告 「カントー橋建設にかかる HIV/AIDS 予防事業」の成果

ベトナム政府よりカントー橋の建設を受注した大成・鹿島・新日本製鐵JOより、HIV/AIDS感染の危険性が高い労働者を対象としたエイズ予防事業の委託を受け、2006年2月～2008年8月にかけてこの事業を実施しました。

橋の建設などのインフラ開発では出稼ぎ労働者や移動労働者が雇われ、建設現場に一時的に滞在します。多くが男性である単身労働者が、家族から離れた寂しさや開放感、異郷で暮らすことの疎外感などから、娯楽を求める傾向があります。建設現場付近ではこれらの人々を顧客とするさまざまなビジネスが繁盛しますが、中には性産業も含まれ、エイズを含む性感染症の拡大が懸念されます。この事業では、カントー橋建設に関わる建設労働者とコミュニティの人々のHIV/AIDS感染のリスクを減少させるために、労働者や性産業従事者への情報提供や啓発、企業の健康管理者およびヘルス・クリニック関係者の能力向上、感染リスクの高い娯楽施設における情報提供・コンドームの普及などを行ってきました。その成果として、以下の点が挙げられます。



企業の健康管理担当者とヘルス・クリニック関係者を対象としたHIV/AIDSや性感染症に関するカウンセリングのトレーニング実施風景

- 建設労働者の性感染症に関する意識と知識が向上し、コンドーム使用率(自己申告に基づく)とコンドーム購入率が増えた。
- 性産業従事者の中から選ばれたピア・エデュケーター(同世代の知人などに伝える役割を担う人)の能力が向上し、仲間たちへの感染予防の普及活動が行われた。普及活動に用いられた感染予防のリーフレットは性産業従事者だけでなく、その顧客やカラオケ、レストランにも配布された。

- 感染リスクの高い娯楽施設(カラオケ、レストラン、ホテル)経営者の感染予防活動への参加は、事業開始時はゼロだったが、2008年2月までに22回に増えた。このような店ではコンドームやリーフレットが置かれており、感染予防の普及を促進している。
- 企業の健康管理の担当者とヘルス・クリニック関係者のHIV/AIDSや性感染症に関する知識およびカウンセリングスキルが向上した。また、カントー市内のHIV/AIDSと性感染症を取り扱う医療機関の照会システムが確立し、労働者が活用するようになった。

新規事業 「地域におけるHIV予防 および偏見・差別の軽減事業」

■基本情報

活動期間：2008年11月～2009年4月(6カ月間)

地域：ベトナム カントー市 ニ・キウ、チャイ・ラン、ビン・トゥイ、オ・モン地区

対象者：地域住民、大学生、工場スタッフ、娯楽施設の経営者、HIV陽性者

前述の「カントー橋建設にかかるHIV/AIDS予防事業」では、建設労働者を主な対象とした取り組みを行いました。引き続き大成・鹿島・新日本製鐵JOの支援を受け、地域コミュニティを主な対象とする新たなHIV/AIDS予防と偏見・差別を軽減するための事業を開始しました。

カントー市が位置するメコン地域では経済社会状況が急速に変化しています。特に人々の移動や移住が増加し、HIV感染拡大の原因となっており、カントー市はHIV感染の危険性が高い地区として認識されています。

HIV陽性者の多くは注射による薬物使用者や性産業従事者で、HIV陽性者に対する偏見や差別が存在します。地域社会の否定的な態度のために、HIV陽性者は医療やその他の社会サービスにアクセスすることが困難になっています。地域住民のHIV感染リスクやHIVの感染経路についての理解向上をはかることにより、新たなHIV感染の予防を促進できると同時に、HIV陽性者への偏見や差別の軽減にもつながるといえます。

この事業は、CAREとカントー市のエイズ予防センターが協働で実施しています。啓発イベントや路上キャンペーンを通じて、カントー市市民、特に若者におけるHIV感染リスクの高い行動の抑制およびHIV陽性者への偏見・差別の軽減を目指します。

レソト王国



センク川溪谷における干ばつ被災者の 栄養改善事業 終了報告

事業部 貝原塚 二葉

レソト王国



皆で協力して菜園作り



菜園を取り囲んで、モニタリングの方法を学ぶ村人



コミュニティにおけるミーティングで、支援する対象世帯を選定するため、真剣な表情で話し合う村人たち

南アフリカ共和国(以下、南ア)に周囲を360度囲まれた国、レソト王国。この国は、2006年～2007年にかけて、過去30年間で最悪の干ばつに見舞われました。この干ばつにより、レソト国内で生産される主要作物であるメイズ(白とうもろこし)などの農作物の出来高は激減しました。また、一部隣国である南アからの輸入に頼っていたものの、世界規模の気候変動や食糧価格高騰などの影響により、レソトの人々の置かれた状況は非常に深刻でした。手に入る作物が不足し、特にエイズ患者や孤児など影響を受けやすい人々の栄養状態が悪化しました。

そこで、ケア・インターナショナル ジャパンは、(特活)ジャパン・プラットフォームの助成金を受け、2008年4月よりセンク川溪谷東側において干ばつ被災者に対する支援を開始しました。山岳地帯の多いレソト国内においても、センク川溪谷周辺は特にアクセスが悪いなどの理由から、支援が十分に届いていない地域でした。この事業では、主に以下の活動を行いました。

- 女性や子どもが中心である世帯・HIV陽性者およびエイズ患者を抱える世帯・特に貧しい世帯などを対象に、栄養改善のための家庭菜園設置の支援
- 家庭菜園設置のためのボランティアの農業普及員の研修
- 家庭菜園設置のための道具と種子の配布
- 家庭における子どもの栄養状況の把握と栄養に関する知識向上を目的としたボランティアのコミュニティ・ヘルス・ワーカーに対する研修

家庭菜園を通じた栄養改善

～円形菜園と地表型菜園の設置と野菜栽培

野菜を購入することが難しい貧困家庭において、家庭菜園(円形菜園あるいは地表型菜園)を作り、作物を栽培して、必要な栄養を摂取することができるよう、支援を行いました。家庭菜園の設置にあたっては、すべてCAREからの支援に頼るのではなく、準備から実施までコミュニティが主体となった協議に基づく形で行われました。石や土壌の確保など菜園設置に必要な資材の準備にも、コミュニティが主体的に関わりました。

まず、支援対象地域である11コミュニティでは農業普及員(合計22名 男性:13名、女性:9名)が選出されました。菜園設置にあたっては、研修を受けた農業普及員がCAREの技術指導を受けながら、村人に対して家庭菜園や点滴灌漑キット(チューブ付き水タンク)設置のデモンストレーションを実施し、さらに各家庭におけるフォローアップも行いました。孤児のみで暮らしている世帯がデモンストレーションに参加しやすく

するために、学校においてもデモンストレーションが行われました。参加者たちはとても積極的に学び、熱心に作物を育てようとする姿が見られました。この事業の支援対象者でない村人たちの中にも、デモンストレーションに自主的に参加し、自ら家庭菜園を設置して活用する人々もおり、村人たちの家庭菜園に対する高い関心がうかがわれました。

事業終了時まで、活動対象地域11コミュニティ756世帯において、円形菜園が合計1,000個、地表型菜園が合計1,340個、設置されました。また、菜園設置に必要な道具と5種類の野菜の種子（ほうれん草、にんじん、トマト、かぶ、ビートルート）および点滴灌漑キット778セットを配布しました。

コミュニティ・ヘルス・ワーカーに対する栄養改善研修

レソトでは、各村に主に女性から構成されるボランティアのコミュニティ・ヘルス・ワーカーがおり、村人の健康相談への対応、5歳児以下の体重・身長測定、治療が必要な村人に対する最寄りの医療機関の紹介や輸送支援などの活動を行っています。しかし、政府はコミュニティ・ヘルス・ワーカーの能力向上を目的とした研修などを行っておらず、ヘルス・ワーカーたちの能力にもばらつきがあり、村人の健康状態などについて正確に把握されていない状況でした。コミュニティ・ヘルス・ワーカーとクリニックとの連携も弱く、必要に応じた措置がとられていないなどの問題が生じていました。

そこで、コミュニティ・ヘルス・ワーカーが子どもの栄養状態を正しく把握し、村人を対象とした栄養に関する講習会や家庭訪問の際に適切な栄養指導を行うことができるよう、ヘルス・ワーカーの能力向上のための研修を実施しました。ヘルス・ワーカーたちのレベルにあった現地語(ソト語)の研修用教材が乏しかったため、(特活)シェア=国際保健協力市民の会の協力で派遣された日本人栄養専門家のアドバイスを得ながら、既存の研修内容の改定を進めました。

研修やその後のフォローアップの結果、ヘルス・ワーカーたちは、きちんと乳幼児の身長や体重を測ったり、記録をつけることができるようになりました。また、5歳児以下測定や村での集会、クリニックや病院での妊婦を対象とした母親健診などで、研修を受けたコミュニティ・ヘルス・ワーカーによる栄養や健康に関する講習会が実施されるようになり、主に母親たちが栄養についての知識を得るよい機会となりました。講習会のトピックは、妊産婦の高栄養摂取の重要性、乳幼児の食事、栄養失調にかかる5つの原因、乳幼児がどのような症状を発症した際にクリニックに連れて行くべきかなど11のトピックがあり、毎回、1トピックずつ取り上げられました。また、研修を受講したコミュニティ・ヘルス・ワーカーが所属するクリニックや病院では、改定された現地語の研修教材を使って彼らが

自主学習を行うようになりました。以前は、きちんとした研修がなく、このような取り組みがほとんど行われていなかったことを考えると大きな前進です。この活動を通して、活動対象地域11コミュニティ69村から35名のコミュニティ・ヘルス・ワーカーが研修を受けることができました。

この事業の対象地域であるセンク川渓谷は、各村、各コミュニティへのアクセスの悪さから、なかなか支援が届かなかった地域でしたが、地域住民の積極的な参加が得られたことで、7カ月という短期間にもかかわらず、ある程度の成果を得ることができたと思います。しかし、この事業で支援した家庭菜園の普及・定着やコミュニティ・ヘルス・ワーカーのさらなる能力向上は長期的に取り組むべき課題です。現在、CAREレソトの現地スタッフにより、その後のフォローアップが行われています。ケア・インターナショナル ジャパンでは、今後、さらにこの事業の成果を確実にするための後続事業を実施する計画です。



ボランティアのコミュニティ・ヘルス・ワーカーを対象とした研修風景



研修で子どもの体重を測定するための器具の使い方を学ぶコミュニティ・ヘルス・ワーカーたち

CAREストーリー ～ ガザ地区 ～

「学校に爆弾が落ちたとき、友だちはそこにいたのかな？」

ガザ地区CARE現地事務所
プロジェクト・マネージャー Jawad Harb

2008年12月末から約3週間にわたって、パレスチナ自治区のガザ地区では、イスラエル軍による激しい攻撃が続きました。激しい爆撃のため、CAREのプロジェクトも中止せざるを得ない状況となり、CAREのガザ地区現地事務所のスタッフは自宅で身を潜め、あらゆる物資が不足する中、なんとか生き延びるだけで精一杯の状況でした。

以下は、そんな状況でまさにその瞬間、感じることを現地スタッフが記したストーリーです。彼は、2002年からCAREのガザ地区現地事務所働くパレスチナ人スタッフです。以下のストーリーのほかにも、爆撃地で感じることをつづったストーリーが当団体ホームページに掲載されています。ぜひご覧ください。



(2009年1月11日 現地時間午後12時)

私の息子の学校は今日、空爆によって破壊された。Ziadはまだ6歳で、9月に学校に行き始めたばかりだ。彼は学校が大好きで、特に好きなクラスは体育と美術だ。息子は絵を描くことが大好きなのだ。

しかし、この恐ろしい攻撃が始まってからの16日間、息子は学校に行くことができないでいるし、友だちにも会っていない。次々起こる攻撃と眠れぬ夜が続く中、Ziadが唯一楽しみにしていたのは、学校にまた行くことができるようになることだった。しかし今や、その学校も完全に破壊されてしまった。

兄弟からこの知らせを聞いたZiadは、驚いたことに、無言のまま、ただ銅像のように立ち尽くしていた。普段ははしゃぎ回っている少年が、5分間、一言も言葉を発することができなかったのだ。「パパ、僕は学校でもう友だちと会えないの？」ようやく、息子は私にこう聞いた。そして、「学校に爆弾が落ちたとき、友だちはそこにいたのかな？」。彼は苦しそうにこう聞いた。

私は息子を落ち着かせようとあらゆる努力を試みたが、Ziadは約一時間、激しく泣き続けた。それから夜になり、また苦しみと私たちが一番恐れている時間が始まる。絶え間なく続く空爆だ。爆弾が落とされる中、Ziadの熱が上がっていった。彼はベッドで嘔吐（おうと）し、顔色は青白くなり、これまでに見たこともないほど具合が悪く見えた。

医者であるいとこを呼んだのは午前3時だった。しかし彼が診察する限り、Ziadの身体に悪いところは何もないと言う。



Jawadの6歳の息子、Ziad (C) CARE

Ziadは朝8時に目を覚ますと、こう言った。「パパ、僕、もう学校には行かないよ。また爆弾が来たら怖いから」。

私は自分には何もできないことがあまりにも悲しく、涙が止まらなかった。この2週間、私は父親として、子どもたちが感じる恐怖や気持ちへの理解を示すことができていない。自分の目の前で子どもを失いつつあると感じる恐ろしさほど、つらいものはない。

*ケア・インターナショナル ジャパンでは、ガザ緊急募金へのご寄付を受付中です。詳細は、ホームページをご覧ください。ご不明な点は事務局までお問い合わせください。皆様のご協力をお願いいたします。

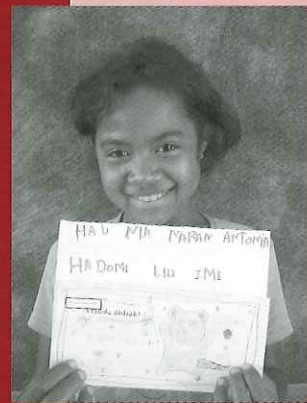
CARE Notice Board

皆様の応援メッセージが、東ティモールの子どもたちに届きました！

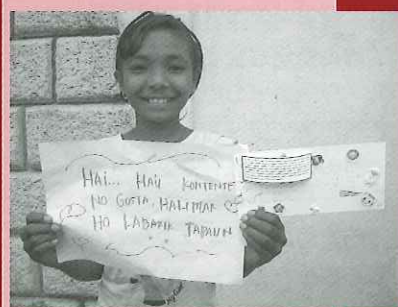
昨年4月、支援者の皆様に、紙製定規に東ティモールの子どもたちへのメッセージを書いていただくことをお願いし、多くの皆様から温かいメッセージ入りの定規をお送りいただきました。当団体では、メッセージ一つひとつに英語の翻訳をつけて東ティモールのCARE事務所に送付、現地スタッフが、それをさらに東ティモールの言語であるテトゥン語に翻訳しました。

そして、新学期が始まった昨年の11月初め、皆様のメッセージが添えられた定規が子どもたちに手渡されました。現地事務所スタッフから、「子どもたちはみんな大喜びでした」という報告が届いています。皆様のおかげで、東ティモールの子どもたちに、日本にも彼らのことを思い、支援している人たちがいるのだということを伝えることができました。ご協力いただきました皆様に、子どもたちに代わり、心からお礼を申し上げます。

受け取った定規と
現地語で書いた
メッセージを見せる
子どもたち



私の名前はアントニアです。
皆さんのことが大好きです。



こんにちは。メッセージを受け取ることが
できてうれしいです。日本の子どもたちと
遊びたいです。

ケア・インターナショナル ジャパン
ニュースレター
CARE World Vol. 11
2009年2月28日発行(季刊)
発行人：野口 千歳
編集：菅沼 みゆき

財団法人 ケア・インターナショナル ジャパン
〒171-0032
東京都豊島区雑司ヶ谷2-3-2
Tel. 03-5950-1335 Fax. 03-5950-1375
E-mail. info@careintjp.org
www.careintjp.org

*このニュースレターのデザイン・レイアウトは、CAREのデザイン
ボランティアさんのご協力により、制作されています。